

(論 文)

保育者養成課程の大学生における保育実習の印象  
および就業意識の希望進路による差違  
—「保育者アイデンティティ」の確立の視点からの検討—

田 爪 宏 二

# 保育者養成課程の大学生における保育実習の印象 および就業意識の希望進路による差違

## —「保育者アイデンティティ」の確立の視点からの検討—

田 爪 宏 二

和文抄録：大学の保育者および小学校教員養成課程において、初めての保育実習を経験した3年生150名に対して質問紙調査を実施した。学生を志望進路（保育職志望、小学校教諭志望、一般職志望）により分類し、分析1では、実習における指導保育者のイメージや実習中に感じた不安、就業意識の志望進路による差異を検討した。分析2では、保育者アイデンティティの確立に関わる要因である「保育者モデルの獲得」および「保育者としての自信の喪失」の規定因の志望進路による差異を検討した。

分析の結果、以下の点が明らかになった。(1)一般職志望者は保育職および小学校教諭志望者に比して実習において保育者としての自信を喪失する傾向にある。(2)就業意識において、保育職志望者は昇進や社会的地位の向上に対する志向や、仕事に対して自発的、挑戦的に取り組もうとする志向が低い。(3)保育者としての自信の喪失における規定因は志望進路によって異なっている。

Key Words: 保育者養成 保育実習 保育者アイデンティティ 就業意識 志望進路

## 問題と目的

近年の大学・短期大学においては、カリキュラムの中に就職後を見据えた長期的なキャリア教育、職業教育の視点を取り入れる必要性が議論されている。そこにおいては、大学における専門的な教育内容によって涵養された資質を将来の進路に結びつけるための様々な取り組みがなされている。その一例として企業体験やインターンシップなどが挙げられるが、残念ながらそれらの社会経験が必ずしも大学におけるカリキュラムと連続性をもたず、大学の学習と就職の為の経験とが乖離し、本来のキャリア教育の意義が十分果たされていない事例も散見される。

そのような中で、従来から比較的大学におけるカリキュラムと卒業後の進路とに一貫性が高い、すなわちカリキュラムが将来の進路に深く結びついているものに、小学校教諭や幼稚園教諭、保育士といった教育、保育職の養成課程がある。特に、幼稚園教諭、保育士(以下、保育者)を養成する短期大学においては、多くの者があらかじめ卒業後の進路を保育者と定めて入学し、また、現在幼稚園や保育所において教師、保育士が不足している現状もあるため、その多くが卒業後の進路として幼稚園教諭、保育所保育士を選択している。さらに、全国保育士養成協議会(2008)は、「反省的実践家(Schön, 1981)」の概念に依拠し、「保育士養成教育は、その専門職に就くための教育ではあるが、決して完成された教育ではなく、準備教育である」という立場から、保育者に

は資格を取得し就職した後も保育現場における実践と反省とを繰り返しながら成長していく姿勢を求めている。つまり、保育者養成校においては保育者としての適切な力量をつけさせた上で保育現場に送り出すまでにとどまらず、学生から現場の保育者までを一貫した保育者としての成長(キャリア形成)の過程として捉え、自身の保育者としての将来像を展望しうる学生を養成するための教育的支援の必要性が提言されている。このような点から、保育者養成は有効なキャリア教育のモデルの1つとして考える事が出来よう。しかしながら、保育者のキャリア形成には様々な問題が指摘されている。その1つに、保育職に就職しても数年のうちに離職する者が多い(平均勤務年数が保育士7.7年、幼稚園教諭7.1年:厚生労働省, 2011)という、保育者の長期的なキャリア形成の難しさの問題があり、その背景には、保育職や保育者としての自分に対してやりがいや満足感を見いだせないといった心理的背景をもつ問題が垣間見られる。

このような状況を踏まえると、保育者養成校においては保育者としての知識や技術を習得していくと同時に、「保育者である自分」と向き合い、保育者である自己を自覚し成長することが課題となるが、この過程を小泉・田爪(2005)はErikson(1959)の生涯発達理論における青年期の発達課題と結びつけ、保育者志望学生における「保育者アイデンティティ」の確立の過程と呼んだ。また田爪・小泉(2006)は、保育者アイデンティティが確立傾向にある学生は授業における模擬保育の実践はもちろん保育そのものにもポジティブなイメージを持ち、保育者としての自己を向上させている姿が見られるが、他方拡散傾向にある学生は、保育の持つ多様性に対して困惑するが、それを克服しようとする意識が低いことを指摘している。

保育者アイデンティティの確立において影響の大きいものの1つに、保育現場での実習(保育実習、教育実習:以下、実習)が挙げられる。すなわち、実習を通して保育者としての自信を獲得し、アイデンティティの確立が促される者がある一方で、実習によって自分の保育者としてのアイデンティティが拡散し、実習が保育者になることを断念する契機となる者もいる。先述した小泉・田爪(2005)は、実習を通じた保育者アイデンティティの確立の問題について、実習において実習生が用いる代表的なストラテジーである「保育者のモデリング」に着目し、保育者アイデンティティの確立傾向にある学生は、指導保育者を有効なモデリングの対象とする事が出来、実習が保育者アイデンティティの確立にとって有効な機会として機能していることを指摘している。また田爪・小泉(2009)は、実習において学生の保育者モデルとなる存在である、指導保育者が実習生を受容しているか否かが、保育者の持つ実習生のイメージおよび実習生に対する不安に影響を与えていること、実習生に基礎的な保育技量があるか否かが、保育者が実習生を受容する主な要因であることを明らかにしている。

ところで、西山・富田・田爪(2007)は、保育者を志望する学生において、保育職が自分の適性に合っていると感ずること(保育職の適性感)が将来の見通しや、動機付けの側面などに強い影響を与え、アイデンティティの形成の有り様が保育職の理解や保育職の適性感と結びついており、アイデンティティの確立が職業認知の基盤となることを示している。また、田爪・小泉(2011)は、保育者養成短期大学における、実習を通じた保育者アイデンティティの確立と就業意識との関係

を検討している。そこにおいては、保育者アイデンティティの確立の指標となる「保育者モデルの獲得」と「保育者としての自信の獲得」に影響を及ぼす要因について探索的に検討を行い、前者については学生のもつ保育者モデルと指導保育者のイメージとを一致させやすいことと、保育職に対して自発的、積極的に関与しようとするのが、保育者モデルの獲得を促し、それが保育者アイデンティティの確立に寄与していた。また、後者について、実習の具体的な内容や保育技術よりも指導保育者に対するネガティブなイメージや保育者との対人関係の関する側面が自信喪失につながり、それが保育者アイデンティティの拡散の要因となり得ることを指摘している。

このような保育者養成と就業との問題に関連して、短期大学ではカリキュラムの多くの部分を保育者養成にあてているため、自ずと学生も保育者を志望する者が多数を占めている。しかしながら、従来は主に短期大学においてなされてきた幼稚園教諭、保育士の養成が、近年4年制大学においても増加する傾向にあり、そこにおいては同様の養成を行っている短期大学に比べ、学生の将来の志望進路が必ずしも保育者ではなく幾分多岐に渡っている。例えば、同時に小学校教諭免許を取得できる大学も多く、小学校教諭を志望する学生が副次的に幼稚園教諭免許や保育士資格を取得する事も少なくない。また、免許・資格を取得しながらも一般企業への就職を志望する者も少なからず存在する。このような、保育者を志望しない者が実習へ参加することによって、一方では保育職の素晴らしさや自身の保育者としての適性を自覚し、保育者アイデンティティの確立がなされる場合もあると思われる。しかしながら他方では、実習において不適応を起こしてしまったり、保育現場から学生が「単に免許、資格を取るためだけの、消極的な実習をしている」という批判を受けたりする事例も散見される。それでは、保育者を志望進路としている学生と、そうでない学生とでは、実習に対する印象や実習を通した保育者アイデンティティの確立にはどのような差異があるのであろうか。この点を明らかにすることは、近年の大学生の特質を踏まえた保育者養成に対して有用であると考えられる。従来の保育者アイデンティティの確立に関する多くの研究は、主に保育者養成短期大学における、保育者を志望する学生を対象に行なわれており、特に4年制大学における、将来の進路として保育職を志望するか否かによる比較は行なわれていない。そこで本研究では、4年制大学の保育者養成課程において、初めての保育現場での実習(保育所実習)を経験した学生に対して質問紙調査を実施し、まず分析1において実習における指導保育者のイメージや実習中に感じた不安、さらには学生のもつ職業に対する意識(就業意識)についての分析を行ない、これらが志望進路によってどのように異なるのかについての検討を行なう。さらに、分析2においては小泉・田爪(2011)が実習を通した保育者アイデンティティの確立に関わる要因として挙げた、「保育者モデルの獲得」および「保育者としての自信の獲得」の規定因として、分析1で取り上げた項目を取り上げて分析し、これらの志望進路による差異について検討する。

## 方法

### 調査対象者・調査時期

調査対象は保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の養成を主とする学科(福祉社会学部児童学科)に所属する大学3年生。2ヵ年(学年)に渡り同様の調査を実施し、計150名(女性120名、男性30名)からの有効回答を得た。なお、本研究の調査対象者は男女の人数の差が大きく、性差に関する統計的分析は難しいため、本研究の分析においては性別の要因は込みとした。

質問紙調査は初回の保育所実習(保育実習I)の終了後(3年次9月)に実施した。なお、調査対象者の所属学科では、3年次の9月(保育実習I)と2月(保育実習II)とにそれぞれ11日間以上の保育所での実習を行い、4年次の9月に2週間の幼稚園での実習(教育実習)を行っている。また、保育所、幼稚園以外の実習としては、3年次の6月に11日間以上の福祉施設での実習(保育実習I)および4年次の6月に2週間の小学校での実習(教育実習)を行っている。

### 質問項目

本研究で用いた質問紙においては、まず基本属性として性別、現在の志望進路について質問した。それに続く質問項目は、保育者養成短期大学における、実習を通じた保育者アイデンティティの確立と就業意識との関係を検討した田爪・小泉(2011)に準じるものであった。具体的には、保育所での実習において直接指導を受けた保育士(指導保育者)の中で最も印象に残っている1名を想起してもらい、その保育者の印象や、指導を受けた感想について回答するように求めた。質問紙には、園の保育内容や保育形態に関する質問項目も含まれていたが、本研究では質問紙調査の中から「指導を受けた後の感想(設問1)」、「指導保育者のイメージ(設問2)」、「実習中に感じた不安(設問3)」、「就業意識(就職において重視すること)(設問4)」を分析対象とした。各設問における質問項目の詳細についてはTable 1に示す。各設問における因子項目は田爪・小泉(2011)と同様とした。

Table 1. 各設問における質問項目

※は逆転項目

#### 1. 設問1「指導を受けた後の感想」の質問項目

因子1：[保育者モデルの獲得] 保育者モデルの獲得，明確化 ( $M=4.29, SD=0.64$ )

- 自分もその人のような保育者になりたいと思った
- 先生は自分が保育者になる上で良いモデルとなった
- もっとその人の指導を受け勉強したいと思った
- その先生のように専門性を身につけたいと思った
- 先生の指導で役に立つことがあった
- 先生のおかげで保育者のイメージが明確になった

因子2：[自信喪失] 自信の喪失，指導保育者への不満 ( $M=2.23, SD=0.66$ )

- 先生の指導について行けないと思った
- 先生に本当の悩み等，相談しにくいときがあった
- 先生の指導でよく理解できないことがあった

先生の指導で迷惑だと思ったことがあった  
実習指導を受けることは苦痛だった  
実習指導を受けることで自分の自信が無くなった  
実習指導を通してこの仕事は難しいと思った

因子3：[指導の楽しさ] 指導を受けて感じた楽しさ ( $M=3.98, SD=0.74$ )

実習指導を受けることは面白かった  
実習指導を受けることは楽しかった  
実習指導のおかげで実習のやりがいを感じた

## 2. 設問2「指導保育者のイメージ」の質問項目

因子1：[指導性・幼児主体] 保育者としての指導性、子どもの主体性を尊重した態度 ( $M=4.36, SD=0.48$ )

指導上手な／誠実な／安定した／責任感が強い／慎重な／子ども好きな／子どもの視点に近い／幼児主体的な

因子2：[穏和な性格] 優しく落ち着いた性格や態度 ( $M=3.99, SD=0.89$ )

穏やかな／優しい／温かい／受容的な

因子3：[活動性] 明るく活発な性格や態度 ( $M=3.88, SD=0.54$ )

※知的な／活発な／※繊細な／明るい／たのしい／派手な／積極的な

## 3. 設問3「実習中に感じた不安」

因子1：[実習態度の不安] 実習生、社会人としての態度や常識に対する不安 ( $M=3.00, SD=0.89$ )

職員に対する態度（接し方、指導の受け方）

子どもに対する接し方

生活態度（成人としての生活マナー等）

保育者の雑務の補助（掃除、片付け、事務等）

因子2：[保育技量の不安] 保育技術、知識に対する不安 ( $M=3.91, SD=0.76$ )

責任実習の計画（指導計画案作成の技術）

実習日誌の書き方、まとめかた

大学での学習達成度（保育の知識等）

保育者として必要な技術（幼児指導力等）

## 4. 設問4「就業意識」

因子1：[上位志向] 高い社会的地位への志向 ( $M=2.65, SD=0.86$ )

職場では昇進したり、高い役職につきたい

地位や名誉をもたらす職業に就きたい

人と張り合えるような仕事がしたい

世間で名前の通った企業や団体に就職したい

因子2：[挑戦志向] 仕事に対する挑戦や自発的な仕事への志向 ( $M=3.54, SD=0.7$ )

誰かの案に従うのではなく自分で計画をたてる様な仕事がしたい

※休日が多く、勤務時間の短い仕事がしたい

※経済的な余裕があれば、働きたくない

自分の個性を活かせる仕事をしたい

因子3：[価値志向] 社会的な意義、価値への志向 ( $M=4.25, SD=0.73$ )

社会的に有意義な仕事をしたい

天職だと感じる仕事をしたい

因子4：[対人志向] 集団で行う仕事やコミュニケーションの良さへの志向 ( $M=4.08, SD=0.58$ )

個人よりも集団の努力が重視される仕事がしたい

周りの人とコミュニケーションをしながら行う仕事がしたい

常に多くの人とのお会いがある仕事をしたい

因子5：[労働条件] 労働条件の重視 ( $M=4.28, SD=0.74$ )

福利厚生が充実している職場で仕事がしたい

自立生活に必要な程度の給料は得られる仕事がしたい

## 結果と考察

### 基本属性

**現在の志望進路** 調査対象者に対し、現在の第1の志望進路を1つ挙げるように求めたところ、小学校教諭53名(35.3%)、幼稚園教諭32名(21.3%)、保育所保育士34名(22.6%)、児童福祉施設保育士3名(2.0%)、一般企業/その他(以下一般職)22名(14.7%)、未回答6名(4.0%)であった。このうち、以降の分析では幼稚園、保育所、児童福祉施設志望の計69名(46.0%)を保育職志望としてまとめた。

**最も印象に残っている指導保育者** 保育所での実習において最も印象に残っている指導保育者について回答を求めた結果、その性別は女性143名(95.3%)、男性5名(3.3%)、未回答2名(1.3%)であり、職種は担任113名(75.3%)、主任24名(16.0%)、園長2名(1.3%)、その他7名(4.7%)、未回答4名(2.7%)であった。

### 分析1：各設問における志望進路による差異

**設問1. 指導を受けた後の感想** 実習においては、保育の体験とともに、自身の実習に対して指導保育者から受ける評価が実習に対する印象を規定すると考えられる。そこで本研究では、指導保育者から指導を受けた後に感じた印象や感想について、Table 1-1に示す質問項目を設け、各項目について、「とてもそう思う(5)―全くそう思わない(1)」の5件法で回答を求め、得点化した。因子項目は「保育者モデルの獲得」、[自信喪失]、[指導の楽しさ]の3因子から構成される(Table 1-1参照)。因子項目の得点の平均値を尺度得点とした(以下、尺度得点の算出については全て同様の方法を用いた)。因子間の尺度得点を対象者内の1要因分散分析により比較した結果、主効果が有意であり( $F(2, 298)=363.41, p<.001$ )、有意水準5%のBonferroni法による多重比較の結果(以下、対象者内の1要因分散分析における多重比較については全て同様の方法を用いた)、[保育者モデルの獲得]、[指導の楽しさ]、[自信喪失]の順で得点が高かった。この結果から、尺度得点の全体的傾向としては、因子[保育者モデルの獲得]および[指導の楽しさ]の平均値が5点中4前後と高く、一方[自信喪失]の平均値は低く、おおむね指導を受けた後の感想はポジティブなものであったことが伺われる。

指導を受けた後の感想の各因子の尺度得点について、志望進路(保育者、小学校教諭、一般職)による比較を行なった(Figure 1)。対象者間の1要因分散分析の結果、因子[保育者モデルの獲得] ( $F(2, 141)=3.82, p<.05$ )および[自信喪失] ( $F(2, 141)=5.59, p<.01$ )において主効果が有意であった。有意水準5%のtukey法による多重比較の結果(以下、対象者間の1要因分散分析における多重比較については全て同様の方法を用いた)、因子[保育者モデルの獲得]においては、小学校教諭志望者における得点は一般職志望者におけるそれよりも高かった。また、因子[自信喪失]においては、一般職志望者における得点は小学校教諭および保育職志望者におけるそれよりも高かった。以上の結果から、教職や保育職志望者は、一般職志望者と比較して、実習を通じた保育者モデルの獲得が促され、また実習によって保育者としての自分に対する自信を高めることが出

来ていると考えられる。

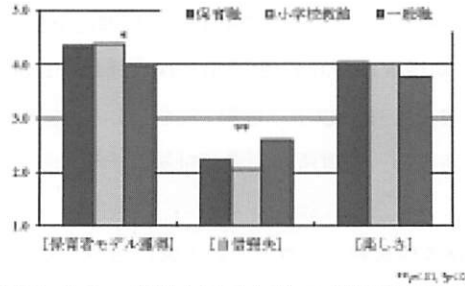


Figure 1. 志望進路による、指導を受けた後の感想(設問1)の尺度得点の差異

ところで、アイデンティティの確立には、望ましい自己像を形成するための有効なモデルの存在と、自信の獲得が重要な要因であるとされる(大久保, 2000)。これを保育者アイデンティティと実習との関係に当てはめれば、実習を通して望ましい保育者のモデルを獲得すること、保育に対して自信を身につけることが保育者アイデンティティの確立状況の指標となり得ると考えられる。このことに関して田爪・小泉(2011)は、設問1「指導を受けた後の感想」の因子1「保育者モデルの獲得」、因子2「自信喪失」に着目し、その高低によって保育者アイデンティティが確立傾向、拡散傾向にある者を抽出している。本研究においても同様の方法により抽出を試みた。具体的には、まず、各因子の得点について、平均値+0.5SD(標準偏差)(「保育者モデルの獲得」では4.61、「自信喪失」では3.03)以上の者を高得点群、平均値-0.5SD(「保育者モデルの獲得」では3.97、「自信喪失」では2.19)未満の者を低得点群、その中間、すなわち得点が平均値±0.5SDの範囲の者を中得点群と分類した。さらに、「保育者モデルの獲得」が高得点群、かつ「自信喪失」が低得点群である者を保育者アイデンティティの「確立群」とし、反対に、「保育者モデルの獲得」が低得点群、かつ「自信喪失」が高得点群である者を保育者アイデンティティの「拡散群」とした。この区分に基づき、各志望進路における保育者アイデンティティの確立群、拡散群の比率を比較した。その結果、保育者アイデンティティの確立群に含まれる者は、保育職志望者では69名中21名(30.4%)、小学校教諭志望者では53名中19名(35.8%)、一般職志望者では22名中2名(9.1%)であり、保育職および小学校教諭志望者に比して、一般職志望者における割合が小さかった( $\chi^2(2)=7.31, p<.05$ )。一方、保育者アイデンティティ拡散群に含まれる者は、保育職志望者では69名中6名(8.7%)、小学校教諭志望者では53名中0名(0.0%)、一般職志望者では22名中5名(22.7%)であり、保育職および小学校教諭志望者に比して、一般職志望者における割合が大きかった( $\chi^2(2)=11.64, p<.01$ )。つまり、一般職志望者は保育職および小学校教諭志望者に比して、保育者アイデンティティの確立群に含まれる者が多く、拡散群に含まれる者が少ないといえる。本調査の実施時期は初めての保育所実習を終了した時点であり、その後も保育所実習(保育実習Ⅱ)や幼稚園実習(教育実習)が控えているが、保育職や教諭を志望していない学生はこの時点で既に保育者としてのアイデンティティが拡散傾向に有る者が多い事が伺われる。



**設問2. 指導保育者のイメージ** 実習においては、指導保育者は実習生のモデリングの対象となるため、指導保育者に対してどのようなイメージを持つかが実習生の保育観や保育者観を左右する要因になると考えられる。本研究では、指導保育者のイメージについて、セマンティック・ディファレンシャル(SD)法を用い、20の形容詞対(Table 1-2参照、例:「明るい-暗い」、表中には形容詞対のうちポジティブな形容詞を表記した)について、形容詞対のうちポジティブなもの(5)ーネガティブなもの(1)の5件法で回答を求めた。因子項目は「指導性・幼児主体」、「穏和な性格」、「活動性」の3因子から構成される。因子間の尺度得点を1要因分散分析により比較した結果、主効果が有意であり( $F(2, 298)=31.11, p<.001$ )、多重比較の結果、因子「指導性・幼児主体」の尺度得点は「穏和な性格」および「活動性」のそれよりも高かった。ここから、尺度得点の全体的傾向としては、指導者に対して指導性や子どもの主体性を尊重した態度を感じていたことが伺われる。

指導保育者のイメージの各因子の尺度得点について、志望進路による比較を行なった(Figure 2)。対象者間の1要因分散分析の結果、因子「温和さ」において主効果に有意傾向がみられ( $F(2, 141)=2.51, p<.10$ )、小学校教諭および保育職志望者における尺度得点は一般職志望者におけるそれよりも高い傾向がみられた。

**設問3. 実習中に感じた不安** 実習の中で感じた不安について、実習における主要な活動としてTable 3に示す8項目を挙げ、各項目について「とても心配だった(5)ー全く心配でなかった(1)」の5件法で回答を求めた。因子項目は「実習態度の不安」、「保育技量の不安」の2因子から構成される(Table 1-3参照)。因子間の尺度得点をt検定により比較した結果、因子「保育技量の不安」の得点は「実習態度の不安」のそれよりも高かった( $t(149)=14.17, p<.001$ )。つまり、尺度得点の全体的傾向としては、学生の不安は保育技術、知識に対して高いと考えられる。

実習中に感じた不安の各因子の尺度得点について、志望進路による比較を行なったが(Figure 3)、対象者間の1要因分散分析の結果いずれの因子においても主効果はみられなかった。

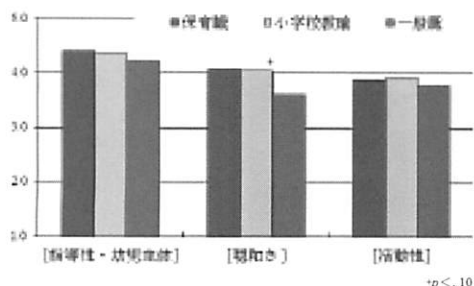


Figure 2. 志望進路による、指導保育者のイメージ(設問2)の尺度得点の差異

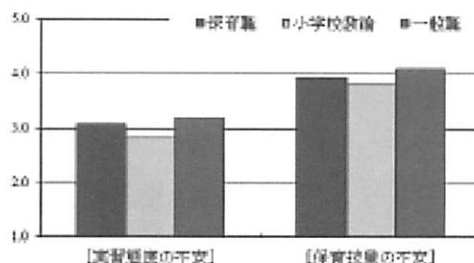


Figure 3. 志望進路による、実習中に感じた不安(設問3)の尺度得点の差異

**設問4. 就業意識(就職において重視すること)** 具体的な志望進路についてはフェイスシートにおいて回答を求めているが、その職業を選択しようとする動機はいかなるものであるのかについて、本研究では学生の持つ就業意識に関する質問を行なった。質問項目は安達(1998)、島本

(2003)による就業動機尺度の一部を使用し、就職において重視することについてTable 1-4に示す15項目を挙げて、「あなたが就職先を選ぶ動機として、次の各項目はどのくらいあてはまりますか？」と質問し、各項目について「とてもあてはまる(5)―全くあてはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。なお、島本は福祉職志望学生の就業動機を検討しているが、福祉職とは近接領域である保育職についてもこの尺度は応用可能であると考えられる。因子項目は〔上位志向〕、〔挑戦志向〕、〔価値志向〕、〔対人志向〕、〔労働条件〕の5因子から構成される(Table 1-4参照)。因子間の尺度得点を1要因分散分析により比較した結果、主効果が有意であり( $F(2, 298)=31.11$ ,  $p<.001$ )、多重比較の結果、因子〔価値志向〕、〔対人志向〕、〔労働条件〕の得点が高く、次いで〔挑戦志向〕、〔上位志向〕の順で得点が高かった。ここから、因子尺度得点の全体的傾向としては、保育者に対する社会的意義とともに現実的な労働条件が重視されている一方で、社会的地位への志向は低いことが伺われる。

就業意識の各因子の尺度得点について、志望進路による比較を行なった(Figure 4)。対象者間の1要因分散分析の結果、因子〔上位志向〕( $F(2, 141)=6.34$ ,  $p<.01$ )、〔挑戦志向〕( $F(2, 141)=9.61$ ,  $p<.001$ )、〔対人志向〕( $F(2, 141)=3.88$ ,  $p<.05$ )において主効果が有意であった。多重比較の結果、因子〔上位志向〕においては保育職志望者における尺度得点は一般職志望者におけるそれよりも低かった。〔挑戦志向〕においては、小学校教諭志望者における尺度得点は保育職志望者におけるそれよりも高かった。〔対人志向〕においては、小学校教諭志望者における尺度得点は一般職志望者におけるそれよりも高かった。以上の結果から、保育職志望者は昇進や社会的地位の向上に対する志向が低く、また、教育職として近接する小学校教諭志望者よりも仕事に対して自発的、挑戦的に取り組もうとする志向が低いことが伺われる。また、小学校教諭志望者は〔挑戦志向〕とともに〔対人志向〕すなわち仕事におけるコミュニケーションの良さへの志向も高いことから、職業に対して積極的に取り組もうとする志向が強いことが伺われる。

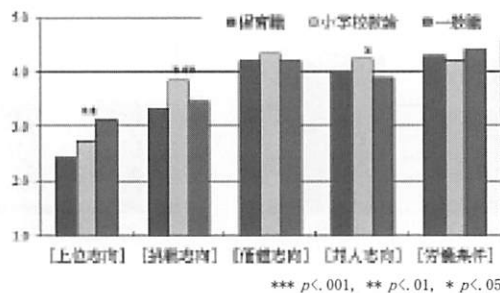


Figure 4. 志望進路による、就業意識（設問4）の尺度得点の差異

## 分析2：志望進路による、保育者アイデンティティ確立の規定因の差異

分析の目的と方法 分析1では、指導保育者のイメージおよび実習中に感じた不安、就業意識について、志望進路による比較を行なった。そこにおいては、指導保育者のイメージおよび実習

中に感じた不安、就業意識の因子項目ごとに分析を行なったが、もう1つの分析の視点として、分析2ではどの項目が保育者アイデンティティの確立に強く影響しているのかについての分析を行なう。具体的には、保育者アイデンティティの確立に関わる設問1「指導を受けた後の感想」の因子[保育者モデルの獲得]および[自信喪失]は、設問2「指導保育者のイメージ」、設問3「実習中に感じた不安」、設問4「就業意識」におけるどの要因によって左右されるのか、またその志望進路による差異について探索的に分析する。分析方法としては、重回帰分析を用い、[保育者モデルの獲得]および[自信喪失]の各尺度得点を従属変数とし、「指導保育者のイメージ」、「実習中に感じた不安」、「就業意識」の各尺度得点を投入後、ステップワイズ法により説明変数を選択した。また、これを志望進路ごとに行ない、説明変数の差異を検討した。分析の結果をTable 2に示す。

Table 2. 志望進路ごとの[保育者モデルの獲得]および[自信喪失]に関する重回帰分析の結果

|                      | 1.[ 保育者モデル獲得 ] |         |         |         | 2.[ 自信喪失 ] |         |          |        |
|----------------------|----------------|---------|---------|---------|------------|---------|----------|--------|
|                      | 志望進路 (全体)      | 保育職     | 小学校     | 一般職     | (全体)       | 保育職     | 小学校      | 一般職    |
| 決定係数 (自由度調整済 $R^2$ ) | .477***        | .525*** | .431*** | .642*** | .448***    | .476*** | .334***  | .344** |
| 指導保育者のイメージ           | [ 指導性・幼児主体 ]   | .445*** | .584*** | .588*** | .690***    | -.171*  | -.311**  | -.426* |
|                      | [ 穏和さ ]        | .202*   |         |         |            | -.246** | -.413*** |        |
|                      | [ 活動性 ]        | .127*   | .200*   |         |            |         |          | -.476* |
| 実習中に感じた不安            | [ 実習態度の不安 ]    |         |         |         |            | .398*** | .499***  | .364** |
|                      | [ 保育技量の不安 ]    |         |         |         |            |         |          |        |
| 就業意識                 | [ 上位志向 ]       |         |         |         |            |         |          |        |
|                      | [ 挑戦志向 ]       |         |         |         |            | -.197** | -.212*   |        |
|                      | [ 価値志向 ]       | .163**  | .250**  | .310**  | .327*      |         |          |        |
|                      | [ 対人志向 ]       |         |         |         |            |         |          |        |
|                      | [ 労働条件 ]       |         |         |         |            |         |          |        |

数値はステップワイズ法により選択された項目の標準化偏回帰係数 ( $\beta$ )。\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

**[保育者モデルの獲得]の規定因の志望進路による比較** [保育者モデルの獲得]について、すべての志望進路を込みにした全体では、決定係数 ( $R^2$  (自由度調整済、以下同じ)) = .477であった。説明変数として選択されたものは、「指導保育者のイメージ」の[指導性・幼児主体]、[穏和な性格]、[活動性]、および「就業意識」の[価値志向]であった(Table 2-1)。説明変数として選択された項目の特徴から、指導保育者が子ども主体で指導性がある保育をし、また穏和な性格、活発さといった保育者としての良好な資質をもっていると感じられ、かつ学生自身が保育職に対して社会的な意義や価値を期待しようとする志向を持っていることが、実習の中で保育者モデルを明確化する要因であると考えられる。

志望進路により[保育者モデルの獲得]の規定因を比較したところ、全ての志望進路において保育者のイメージの[指導性・幼児主体]、就業意識の[価値志向]が説明変数に挙げられたが、保育職志望者においてのみ [活動性]が説明変数となっており、保育職志望者において、将来像としての保育者モデルの獲得には指導保育者に活動的なイメージを持つことが関与していると考えられる。

**[自信喪失]の規定因の志望進路による比較** [自信喪失]について、すべての志望進路を込みにした全体では、決定係数=.488であった。説明変数として選択されたものは、「指導保育者のイメージ」の[指導性・幼児主体]、[穏和な性格]および「就業意識」の[挑戦志向]が負の方向で規定因になり、さらに「実習中に感じた不安」の[実習態度の不安]が規定因であった(Table 2-2)。説明変数として選択された項目の特徴から、指導保育者に対して子どもへの指導性や穏和な性格といった資質に疑問を持ち、また保育職に対して自発的、挑戦的に関わろうとする志向が低いこと、さらには実習において実習態度に不安を持っていることが、実習によって自信を喪失する要因であると考えることができる。

志望進路により[自信喪失]の規定因を比較したところ、第一の規定因となった項目が志望進路により異なっていた。すなわち、保育職志望者では実習態度面の不安の高さが、小学校教諭志望者では保育者を冷たいと感じることが、一般職志望者では保育者が活動的でないと感じる事が、それぞれ保育者としての自信を喪失する第一の説明因であった。また、「就業意識」の[挑戦志向]の低さは保育職志望者のみ、「指導保育者のイメージ」の[穏和な性格]の低さは小学校教諭志望者のみ、[活動性]の低さは一般職志望者のみにおいてそれぞれ規定因となっており、[保育者モデルの獲得]の規定因がすべての志望進路において概ね類似していたのとは対照的に、[自信喪失]の規定因については志望進路による差異が顕著であった。

## 総合考察

### 研究結果の総括

本研究では、4年制大学の保育者養成課程において保育所実習を経験した学生を対象にした調査結果から、実習の感想および就業意識と志望進路との関係を中心に分析を行なった。分析1においては、指導保育者から指導を受けた感想、実習において指導保育者のイメージ、実習中に感じた不安、および就業意識の、志望進路による差異について分析した。その結果、指導を受けた感想および就業意識において志望進路による差異が顕著であり、前者については小学校教諭や保育職を志している学生は、一般職を志望している者と比較して、実習を通した保育者モデルの獲得が促され、また実習によって保育者としての自信を高めていることが示唆された。小学校教諭を志望する学生は、対象となる子どもの年齢や実習の内容は小学校とは異なってはいても、教育職として近接領域にある保育所での実習を体験することにはさほど抵抗感が無く、保育職を志している学生と同様に保育者としての資質を身につける事が出来たと考えられる。他方、教育、保育職への就職志望を持たず、一般職を志望している学生においては、実習が保育者としての自信を低下させ、保育者アイデンティティの拡散傾向に繋がっている状況が伺われた。なお、本研究における質問紙は実習後に実施したものであるため、一般職志望者の中には、実習前から保育職への就職志望が無かった者だけでなく、実習後すなわち実習の経験により保育職への就職志望が無くなった者もいることが予想される。本研究の結果からは実習により就職志望に変化が生じた

か否かは明ではないが、少なくとも実習の経験と就職志望との間にはある程度関係があると考えられる事が出来よう。また、後者の就業意識については、保育職志望者は一般職志望者よりも昇進や社会的地位の向上に対する志向が低いことが示された。この結果については、保育職を志す学生は、就職に対しては社会的な成功よりもむしろ「子どもが好き」といった職業特性に関わる指向性が強いことによると考えられる。また、小学校教諭志望者よりも仕事に対して自発的、挑戦的に取り組もうとする志向が低いことが示された。この結果については、学生は保育職よりも小学校教諭に対して自発的、挑戦的な職業であるというイメージを持っている事が考えられるが、これに加えて小学校教諭になるためには教員採用試験の受験が必要になり、それは保育職に比して難関であることも、職業に対する自発的、挑戦的な印象を高めていることが推察される。

分析2では、保育者アイデンティティの確立の指標となる設問1の[保育者モデルの獲得]と[自信喪失]について、それぞれの規定因の志望進路による差異を検討した。まず、保育者モデルの獲得については、すべての志望進路に共通して、指導保育者に対して保育者としての良好な資質を認識し、保育職に対して社会的な意義や価値を期待しようとする志向を持つことが規定因となることが示唆された。また特に保育職志望学生においては、指導保育者に活動的なイメージを持つことが保育者モデルの獲得を促す要因であった。

他方、保育者としての自信の喪失については、志望進路による差異がみられ、実習において保育者としての自信を得るか失うかの規定因は、志望進路によって異なることが示唆された。この結果は、保育や実習に対する認識が志望進路によって異なる可能性を示唆していると考えられる。例えば、分析1において自身を喪失しやすいことが示された一般職志望者においては、指導保育者に対して活動的なイメージを持つことができないことが自信喪失に繋がっていることが示された。小泉・田爪(2005)によれば、保育者アイデンティティの確立傾向にある学生は、指導保育者を有効なモデリングの対象とする事が出来ているという。活動的であることは多くの学生が保育者に対して抱くイメージであると思われるため、一般職志望者においてはこのような典型的な保育者のイメージを指導保育者に見いだせないことがモデリングを困難にし、自信喪失に至っているという可能性が考えられる。

本研究において、保育者アイデンティティの確立に関わる実習に対する印象や、就業意識が志望進路によって異なっていたことは、特に志望進路が多岐に渡る4年制大学における保育者養成、実習指導を卒業後の進路の多様性をも見据えたキャリア教育の視点から見直す必要性を示唆したものであると考えられる。本来、保育者養成や保育現場における実習指導は、保育者を目指している学生を前提として行なわれるものであるが、資格・免許への志向が社会的に増加する中、様々な学生の特性に応じた教育的支援が必要になるであろう。また他方では、学生の個々の志望進路を尊重しながらも、養成過程の中で学生が保育職の社会的意義や素晴らしさを理解し、保育者アイデンティティの確立がなされていき、保育職への志望が促されていくための教育的支援の取り組みも必要であるといえよう。

## 今後の課題

さいごに、本研究の今後の課題について述べる。まず、本研究における調査の実施時期が3年次の中盤であったことから、志望進路が明確化しつつもまだ不確定な部分もあったと思われる。また、調査は保育現場での初めての実習の経験後に実施したものであるため、その後の実習経験によって実習や保育職に対する印象も変化する可能性が考えられる。これらの点を踏まえると、就職に対する意識の変化や実習の進度を踏まえた、時系列的な変化についても検討する必要がある。さらに、実習指導をはじめとする保育者養成における、志望進路の特性を踏まえた個別的な教育的支援のありがたについても検討する必要がある。

## 引用文献

- 安達智子 (1998). 大学生の就業動機測定を試み. 実験社会心理学研究, **38**, 172-182.
- Erikson, E. H. (1973). 自我同一性(小此木啓吾訳). 誠信書房. (Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. International University Press.)
- 小泉裕子・田爪宏二 (2005). 実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究—保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連—. 鎌倉女子大学紀要, **12**, 13-23.
- 厚生労働省 (2011). 平成22年賃金構造基本統計調査.
- 西山修・富田昌平・田爪宏二 (2007). 保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造. 発達心理学研究, **18**, 196-205.
- 大久保純一郎 (2000). 青年期の発達と心の問題. 藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿編, 青年期以降の発達心理学, 北大路書房, pp.41-55.
- Schön, D. A. (2001). 専門家の知恵 : 反省的実践家は行為しながら考える(佐藤学・秋田喜代美訳). ゆみ出版. (Schön, D. A. (1981). *The reflective practitioner: how professionals think in action*. New York: Basic Books.)
- 島本たか子 (2003). 福祉職志望学生の就業動機—価値志向動機が福祉職志望意志に与える影響—. 関西学院大学社会学部紀要, **95**, 171-183.
- 田爪宏二・小泉裕子 (2006). 実保育者志望学生の「保育者アイデンティティ」確立に関する検討—模擬保育の実践を通して—. 鎌倉女子大学紀要, **13**, 27-38.
- 田爪宏二・小泉裕子 (2009). 実習担当保育者の持つ実習生のイメージと実習生に期待する資質に関する検討. 鎌倉女子大学紀要, **16**, 13-23.
- 田爪宏二・小泉裕子 (2011). 保育者志望学生の実習を通じた「保育者アイデンティティ」の確立と就業意識との関連. 日本発達心理学会第22回大会発表論文集, 456.
- 全国保育士養成協議会 (2008). 保育士養成システムのパラダイム転換Ⅲ—成長し続けるために養成校でおさえおきたいこと—(保育士養成資料集第48号).

# A Survey of Images of On-site Training and Vocational Motives Differences between Students' Hope for Future Career at the University of Childcare Worker Training Course: From the Viewpoint of Students' Achievement of "Identity for Childcare Workers"

TAZUME Hirotsugu

This research investigates by a questionnaire to 150 third grader students of a university in the childcare worker (kindergarten and nursery teacher) and elementary school teacher training course who experimented the first on-site training at child-care centers. Based on the hope for students' future careers after graduation, childcare worker group, elementary school teacher group, and office worker group were sampled. In analysis 1, the differences among these groups concerning images of mentors, anxiety of on-site training, and vocational motives were examined. And in analysis 2, factors influencing "acquisition of models of childcare workers" and "waning confidence as childcare workers" that are the factor of identity as childcare workers were examined.

The results of the analyses are as follows.

1. The students of office worker group tended to lose the confidence as a childcare worker in training, in comparison with other career groups.
2. On vocational motives of the students of childcare worker group, the social-value-oriented motives and challenge-oriented motives were low.
3. Factors influencing waning confidence as childcare worker were different between career groups.

**Key Words:** Childcare worker training course, On-site training at child-care center, Identity for childcare workers, Vocational motives, Hope for future career